

日本語とフランス語の deixis (指示詞)^(*)

井元秀剛

0. はじめに

日本語の指示詞「こ、そ、あ」をめぐる諸問題は日本語学的一大テーマであり、多くの論考が積み重ねられてきた⁽¹⁾。特に金水・田窪(1990)は彼らが談話管理理論と名付ける体系のもとに、日本語の各指示詞の性格を理論的に規定したものであり、これによって指示詞の考察は新たな理論構築の段階に入ったと言えるであろう。談話管理理論は筆者のよってつつメンタルスペース理論から多くの刺激をうけており、その意味で本稿は彼らと共通の理論的基盤に立つ。ここでは金水・田窪(1990)でなされた規定をさらに押し進め、フランス語との対比を通じて、deixisに関する汎言語的特質を探る試みを行う。

本稿で扱うのは主として文章中に現れた場所を表す deixis 表現である。この deixis とその対概念である anaphore の定義をめぐっても複雑な問題がからむが、ここでは井元(1993)に従って、「言語が構築するスペースの中に存在する saillant な要素を、言語的概念化を経た意味的特性にのみ基づいて特定する指示を anaphore(照応)と呼び、話者の視点が位置する基準点からの、認知的な距離の指標に基づいて対象を特定する指示」を deixis(ダイクシス)と呼ぶ。

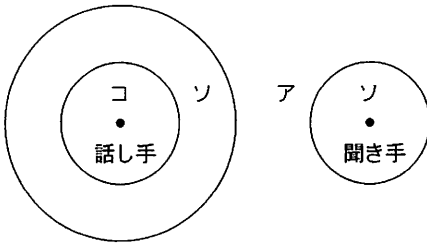
一見して明らかのように、日本語の「こ、そ、あ」は、「遠」「近」「中」の三項体系なのに対して、それに対応するフランス語の *ce, cela, ce N* 等は一項体系である。そこで、対比にあたっては、①日本語の内部で「こ、そ、あ」の指示領域の違いを理論的に規定し、②そのようにして規定された日本語の「こ、そ、あ」とフランス語の *ce N* がどのように対応するかを見る。本稿では主として日本語についての分析を行い、仏語の考察については対照研究の方向を示唆する、いわば序論にあたる。例文として用いたものは、先行研究で引かれたものの他、漱石『門』と鴎外『雁』およびその翻訳である⁽²⁾。

1. 日本語の「こ、そ、あ」

1.1. 現場指示用法

「こ、そ、あ、(ど)」は、その命名も含めて佐久間(1951(初版は1931))に本格的な最

初の考察を見出す、その佐久間以来高橋(1956)服部(1968)等、とりわけ現場指示の領域確定の問題を巡って議論が重ねられてきた。佐久間(1951)に代表される、話し手領域、聞き手領域、第三者領域、という人称区分に基づく確定区分の考え方——それは一時期定説と見なされるほどの勢いを持っていたが——と、古来よりある「近、中、遠」という距離区分に基づく考え方——現在はむしろこちらが優勢である——の二つが拮抗する形で存在してきた。高橋・鈴木(1982)はこれらの議論に終止符を打つべくなされた大掛かりな実験の結果報告であり、そこで提示された次の図が最もよく事実を反映しているように思われる。



すなわち、話し手と聞き手が一定の距離以上に離れている場合、話し手の位置を中心に同心円状に「近、中、遠」の距離感に従って「こ、そ、あ」の領域が構成される一方、聞き手の周辺にも「そ」の領域が構成される。

後はこの事実を理論的にどう捉えるかという問題が残されるわけだが、筆者は人称区分原理と距離区分原理が同一のレベルで共存しているのではなく、人称区分原理を距離区分原理に還元し、心理的距離区分という単一の原理で統一的にとらえるのが望ましいと考える。すなわち、「こ、そ、あ」の領域は話し手と対象との心理的な距離に基づいて確定されるが、聞き手の領域の中にあると判断される対象は心理的に「中」の距離感で捉えられる、ということである。このように考える根拠は、①聞き手の位置が話し手の位置と接近している、いわゆる融合型と呼ばれるタイプの場合、聞き手領域の「そ」が存在しないこと、②時空を超えた不特定多数の読者を聞き手とする文章の場合、聞き手の位置と領域を確定することは困難であること、③聞き手の縄張りに属すると見なされる対象は、三項対立の deixis を持つ言語では中称に、二項対立の deixis を持つ言語では遠称に還元されるという汎言語的な傾向が存在すること、等があげられるであろう。③については Lakoff(1974)のあげる英語とラテン語の例を引いておく。

- (1) If gangrene sets in, you'll lose (your/that) nose.
- (2) Quam diu etiam furor iste tuus nos eludet?
(How much longer will that madness of yours mock us?)

確かに、金水・田窪(1992)が言うように、聞き手がどんなに離れていようと話し手は聞き手のいる場所を「そこ」で指示するはずだから、この人称区分的な「そ」を距離区分原理に直接還元するのは難しい。だがここで問題にする距離は現実の空間に存す

る物理的距離ではなく、話し手が対象との間に感じる心理的距離であり、抽象的なレベルで発話空間を共有する聞き手の操作範囲内に存する対象を、両発話者の操作圏外に存する物理的に近接した位置にある対象より、さらに身近に感じたとしても特に不思議ではない。物理的距離は心理的距離を決定する一つのファクターにすぎず、後者が原理の上で前者に優越することは、現実の物理的空間が存在しない文脈指示の用法をも射程にいれた原理を志向する立場に立つ限り、言うまでもないことである。距離区分説を強固に主張する堀口(1978)はもちろん、人称区分原理の距離区分原理への還元を否定する金水・田窪(1992)でさえ、「そ」の聞き手用法と中距離用法をつなぐより高次の説明原理を志向する立場から、結局は筆者と同じ考えかたに立っているように思われる。

1.2. 文脈指示用法

では、「近、中、遠」の距離感は文章中ではどのように顕現するのであろうか。

まず日本語にみられる興味深い特徴として、この距離感が文の線条性にに基づく生起の位置とは無関係であることをあげておかななくてはならない。大野(1977)は科学論文5種から集めた571の実例に基づく興味深い調査報告であるが、これによると「こ」系指示語とその先行詞を隔てる平均句点数(先行詞がいくつ前の文に存在するか)は1.063であるのに対して、「そ」のそれは0.377にすぎない。また句点数0のもの(同一文内に先行詞が存在するもの)の内訳を詳しく見てみると、「こ」の32例すべてが同一句外に先行詞を持つものに対して、「そ」の193例の方は72例が同一句内、121例が同一句外となっている。「こ、そ」の距離区分を単純に線条性に適応すればむしろ逆の数字が予想されるのに、この結果は何を意味するのであろうか。この「こ、そ」の距離の逆転は、対照言語学的に見ても非常に興味深い。日本語と同じ三項対立の *deixis* を持つラテン語では、「これ」に相当する *hic* と「あれ」に相当する *ille* を用いて併置された二つの名詞句を区別する⁹⁾。

(3) *Melior est certa pax quam sperata victoria; haec in tua, illa in deorum manu est.*

(*Mieux vaut une paix assurée qu'une victoire en espérance, celle-ci est dans ta (main), celle-là est dans la main des dieux.*)

これは日本語の「前者」「後者」に相当するが、翻訳が示すように仏語の *celui-ci, celui-là* にも、さらには英語の *this, that* にもこの用法が存在する。日本語の「こ、そ、あ」にこの用法はない。つまり、羅、仏、英語では、*deixis* の「近、遠」が線条性にに基づく生起の位置を反映しているのに、日本語の「近、中、遠」は全く別な現れ方をするのである。

次に日本語では「あ」の文脈用法の位置づけがはっきりしない。前にあげた大野(1977)の調査で、彼女の用いた科学論文のサンプルの中に、「こ、そ」の用例は571例もあるのに対し、「あ」の用例は1例も見つかっていない。これは一体何を意味するのであろうか。さらに「あ」には久野(1973)が指摘する面白い現象がある。

- (4) a. 話し手 : 昨日山田さんという人に会いました。その(*あの)人、道に迷っていたので助けてあげました。
b. 聞き手 : その(*あの)人、髭をはやした中年の人でしょ。
c. 話し手 : はい、そうです。
d. 聞き手 : (その/あの)人なら私も知っています。私も(その/あの)人を助けてあげたことがあります。(原文は片仮名)

久野(1973)によると、「あ」の対象は話し手、聞き手ともにその対象を知っているものにしか使えず、どちらかが知らないと判断される対象に対しては「そ」を用いなければならない、という。(4b)では、聞き手は、山田という人が彼の知っている人かどうか分からないので「そ」を用いており、(4d)では、山田が自分の知っている人であることが分かったので「あ」を使うことができるのである。しかし、聞き手の側にあまり彼を知らないという気分が強ければ「そ」を使うこともできる。この共有知識仮説は事実の認定をめぐる議論がなされているが、それ以上に重要なのは、「こ、そ、あ」全体に通じる一般原理からこの現象をいかに説明するか、ということであろう。

以下、本稿では距離区分原理でいかにして「こ、そ、あ」の文脈指示用法を説明するか、という試みを行うが、上で述べたように、①「こ」「そ」の距離の逆転はなぜ生じるのか、②「あ」の使用がなぜ少なく、またなぜ文脈指示用法に限り、「あ」の対象が話し手聞き手双方に知られていなければならないという性質を帯びるのか、という問題に答えなければならない。

1.2.1 「あ」の文脈指示用法

「こ」「そ」に比べ、「あ」については文脈指示の用法についてもかなりの研究が進んでいる⁶⁾。その性格解明にあたっては、談話の中で新たに導入された新獲得情報(Newly learned information; 以下NLI)と、談話以前に予め持っていた既獲得情報(Already learned information; 以下ALI)とを区別しなければならない。この二つの情報の区別が大きな意味を持っていることは、「こ、そ、あ」の研究とは無関係に、Akatsuka(1985)、神尾(1990)等でも指摘されてきている。Akatsuka(1985)の例をあげよう。

- (5) A : I'm going to the Winter LSA.
B : If (*As) you are going, I'm going, too.

(Akatsuka, 1985 一部変更)

(6) ((5)の対話の直後に電話でBが妻に報告する)

B : As (*If) Mr. A is going to the Winter LSA, I'm going, too.

(5)の時点で「Aが冬のLSAに行く」という情報は、Bにとってこの対話で初めて知りえた情報であるからNLIに属する。それはほとんど確実なこととして提示されているのに、Bがこれを表現するには未定条件を表すif節を用い、既定条件を表すas節を用いることができない。一方(6)では対話相手が替わり同じ情報がALIに移行しているので、(5)とは逆にas節のみが可で、if節は不可である。同様の事は日本語、仏語についても言える。日本語で(5)の場合に用いるのは「あなたが行くなら、私も行きます」と言う「~なら」の形式で、(6)では「Aさんが行くから、僕も行くよ」と言う「~から」の形式である。仏語にあっても、(5)ではsi節を、(6)ではcomme節を用いる。NLIとALIの区別は汎言語的現象なのである。

これと同様の区別を「こ、そ、あ」の考察に用いたものに、Yoshimoto (1986) 黒田 (1979)、金水・田窪 (1990)、春木 (1991) 等がある。これらの研究の成果を上記の用語を使って一言でまとめるなら、「『あ』の指示対象はALIに存在する」ということである。これをメンタルスペース理論の中へ組み入れるべく、筆者は次のように定式化する。

(7) 「あ」は、ALIが構築する「話し手の記憶」スペースに指示対象を持ち、「あ」で指示される対象は、そのスペース内で対象が元々持っていた属性を発話内世界においても保持する。

さらに「そ」については、

(8) 「そ」はNLIの属性を通じて指定される対象を指示する。

このことを最もよく例示するのは、金水・田窪 (1992) でもとりあげられる次の黒田 (1979)の例であろう。

(9) 先週神田で火事がありました。その火事で学生が二人死にました。

(10) 今日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。

(9)の先行文の「火事」は仏語では *un incendie* であり、これが照応の対象になる定表現 *l'incendie* となるためには、*l'incendie qu'il y a eu la semaine dernière à Kanda* というこでイタリックにしたNLIに依らなければならない。正にこの仏語表現をもって描かれ

る要素こそ、「その火事」の指示対象である。これに対し、(10)の「あの火事」のそれは「話し手の記憶」スペースの中に既に特定の火事として存在している火事であり、人が何人も死ぬにふさわしい属性をも保持して存在しているために、このような発言が可能になるのである。今先行文が導入する対照をA(上例では「今日神田であった火事」)、ALI内にある特定の対象をB(上例では話し手の記憶の中にある火事)とすると、「あ」が本来の語性から指示するのはBであり、このこととAとBが同一指示の関係にあるということとは別の次元に属することがらなのである。この事実に着目し、Bは頭の中に一つの心的イメージとして存在している概念であり、この指示を「概念指示」と呼んで、「あ」に文脈指示の用法はない、と明示的な形で述べたのが春木(1991)である。「あ」の本来的な語性探究の立場にたつ限り、この観察は正しい。だがたとえ副次的な形にしろ、AとBの間に広義の照応関係が成立していることは明らかであり、そのメカニズムの探究を無視するわけにはいかない。上述の説明で、なぜ(9)(10)で「そ」や「あ」が使えるかは明確になったが、次に、なぜ(9)における「あ」、(10)における「そ」が困難であるかを説明しなければならない。久野の共有知識仮説は(9)でなぜ「あ」が使えないかを一応説明するが、(10)の説明には無力である。(7)の後半部の記述はこの(10)を説明するためにあり、金水・田窪(1992)からこの発想を得た。彼らによれば、「あ」を用いてBが指示される時、必ず具体的な状況におけるBの属性が固体の属性とともに呼び覚まされる、と言う。(このことを、「あ」の本性である「話し手からの心理的遠隔性」から導くこともさして難しくはないであろう。「遠隔性」が指定するのはBの存在領域である「話し手の記憶」スペースである。このスペースに所属する要素が、固体の属性以外に種々の属性を持って存在していても不思議はない。ただ、これが日本語の「あ」のみに見られる性質なのか、deixisにまつわる汎言語的特質と一般化し得るものなのかの考察は、別途なされなければならない。)(9)および(4a)におけるAは、聞き手には未知なものとして提示されているのに、これと、言語的に明示されない属性を持つBを結びつけることは、不必要に聞き手を対話から排除することにつながる、という語用論的理由によって排除されることになる。しかし、Bの言語外属性に対する含意が情報伝達の面から必要とされるような語用論的環境、またはその属性が聞き手にも共有されていて含意が失礼にならない語用論的環境のもとでは、Bを持ち出しAと結びつけることも許される。(10)は、含意されるBの属性を根拠に用いた推論、の言説であり、前者の環境にあたる。また、(4a)の「山田さんという人」を「山田さん」に替えた場合に可能になる「あ」による言説は、提示されたAにすでに聞き手も知っている、という含意が存在するために、AとBを結びつける事が許されるという、後者の環境にあたる。金水・田窪(1992)には、(10)における「そ」の不可についての説明はないが、ここで「その火事」を用いると、(10)は「今日神田であった火事」という属性しか持たない火事の、何ら含意されない属性を根拠に下した意味のない推論になってしまい、その意味的なおかしさによって排除される、という説

明がなされるものと思われる。(7)(8)の考え方に立って(4)を説明することには、もはや何の問題もない。(4b)によってAとBが結び付けられたために、(4d)によって聞き手はAによっても、Bによっても共通の対象を指定できるのである。

このように、「あ」に関しては、すでに先行研究によって日本語の体系内部に存する問題には殆ど答えられている、と言ってよい。科学論文等で「あ」による照応の例が見当たらないのは、先行文で導入されたものを直接指示する用法が「あ」にないためであり、「あ」の対象が聞き手にも知られているという効果は、聞き手を対話から不必要に排除してはならない、という語用論的な要請からきているのである。

1.2.2. 文脈用法における「こ」「そ」の区別

上で述べたように、「あ」と「そ」の区別は、NLIとALIの区別に基づいて殆ど先行研究の中で説明されてきている。これに対し、「こ」と「そ」の使いわけに対する定式化は、まだ不完全である、という印象をうける。指示詞のまとまった研究として最も進んでいると思われる金水・田窪(1990)でさえ、まだ感覚的な違いに依存しているようである。少し長くなるが、彼らの論考から文脈指示の「こ」の論考の中心となる部分を引用する⁽¹¹⁾。

- (11)「先に、コとアは原則的に共有された現場または経験スペースの要素しか指し示せない」と述べたが、文脈指示のコは一見これに違反するようである。〔中略〕結論からいうと、文脈指示のコは現場指示の一種であると考えられるが、考察のためにまず文脈指示のコの用法を二種に分けることにする。一つは、あるまとまった内容について説明・解説するために談話に導入した事物を、解説者が指し示す場合に典型的に用いられるコである。仮に、「解説のコ」とでも呼んでおこう。〔中略〕解説のコは、一種の現場指示とみなせる。文や文の構成素は、それ自身が現場に存在するオブジェクトと考えられるわけで、指示詞はそれを指し示しているのである。黒板や地図を考えてみよう。黒板に書かれた文字や地図上の模様を指して「これ」「ここ」などと言うことによって、話し手は文字や模様そのものではなく、文字や模様が意味する内容や現実の地点を指し示すことができる。それと同様に、解説のコは、発話の現場に見えない黒板が導入され、話し手が見えない指さしを行っている、と考えられる。直接指されているのは文や文の構成素であるが、実はそれを通して文や構成素の指示対象を指し示しているのである。」(p. 104)

この説明は、筆者が井元(1989)p.34でなしたce Nの文脈指示用法の解説とほぼ等しい。(11)は感覚的には理解できるが、これはそもそも deixis 表現が文脈指示に使われる場合の一般的メカニズムそのものではないだろうか。確かに「こ」が指し示しているのは

文や文の構成要素を通したその指示対象には違いないが、「そ」の指示がそうではない、という保証はどこにもない。

「こ」の位置づけの不明瞭さは、2年後の金水・田窪(1992)においても変わらない。ここでは「あ」とともに「こ」の検索すべき領域を直接経験領域においている。彼らの言う直接経験領域とは、「あ」に関する限り我々の既定するALIにほぼ重なるものと思われるが、「こ」についてのそれがどのようなものなのか判然としない。もちろん、彼らが「こ」と「あ」の指示領域を同一と考えているわけではない。金水・田窪(1990)によると、「こ」は現場スペース、「あ」は経験スペースの要素を指示する。この二つを直接経験領域と一括させるのは、現場と経験スペースが連続的な性格を持ち、ともに視点者の経験的現実であるという考え方にたっているからである。だが、この二つは本当に連続しているのであろうか。彼らの経験スペースは、「あ」の領域に関する限り、我々の「話し手の記憶」スペースに相当する。「こ」の現場領域がどれほど拡張してもこのスペース内の要素まで指示できるようになるとは到底考えられない。さらに彼らの90年の図式は、聞き手の領域が話し手の領域に組み込まれてしまう融合型では「こ」と「あ」の対立しか生じない、という三上(1970)以来の重層構造モデルをひきずっている。すなわち、「こ、そ、あ」は三項の平面的な対立ではなくて、「こ」と「そ」、「こ」と「あ」の二重の二項対立の構造をなしている、というのである。三上はその根拠として「あれこれ」「そうこう」等の熟語表現をあげ、この中に「あ」と「そ」の対が一つも見つからないことをあげる。この考え方は現在に至るまでかなり広く浸透しているが、「こ」と「そ」の対立の場に「あ」が介在しない、あるいは、「こ」と「あ」の対立の場に「そ」が介在しない、ということが直接証明されたことは未だない。現場指示の用法に関して、当初高橋(1956)は、三上式の図式で聞き手が話し手と接近し「われわれ」の領域を形成する場合、「そ」の領域は現れない、としていたが、高橋・鈴木(1982)に至ってこの図式は否定されている。つまり、そのような融合型が発動される現場指示の場合にも、「そ」の領域は存在するのである。とすれば、「直接経験領域」という抽象的な現場のみを問題にするにしろ、それが現場である以上、融合型だからと言って「こ」と「あ」の対立のみしか存在しない、と考えることはもはやできないのである。

そもそも三上の重層構造モデルは、状況証拠のみに基づくはなはだ根拠の乏しい仮説であった。筆者は、三上の指摘する事実は、「話し手の世界構築における自己中心性」という一般原理で充分説明可能であると考えている。すなわち、対になった指示詞の熟語表現の場合、指示目標としてもともと二つの領域しか存在しない。三項対立の指示の体系を用いてその二つの領域を指定しようとすれば、「こーそ」「こーあ」「そーあ」の、三通りの組み合わせが考えられるが、「こ」は話し手の存在する基準領域であり、これを除いて世界を二分割することは不可能で、無理に成したとしても、話し手の領域としての「こ」が対象の領域としての「そーあ」と別のレベルで対立するため、結

局は三項対立の領域分割に解消されてしまう。要するに、画定すべき領域が二つしか存在しない場合、その二つを表現するためには、「こーそ」「こーあ」を用いる以外ないのである。これが、熟語表現に「あ」と「そ」の対が見つからないことの理由である。こう考えれば、三上の重層モデルの根拠となるものはもはや何もない。重層モデルは抽象化された理論的仮説であり、一つの立場であるから筆者はこれを無条件に否定するものではないが、以上の理由から筆者自身はその立場をとらない。

以上が先行研究に対する筆者のとらえ方である。上記のことをふまえ、筆者自身の仮説を以下に展開していきたい。

「そ」については(8)が、「こ」については以下の定式化が可能のように思う。

- (12) 「こ」は、すでに一定のスペースの中で定名詞句の価値を持つ要素を、「発話状況」スペースに属する要素として指示する。

「発話内世界」と「発話状況」の区別は井元(1989)で導入され、井元(1991)でもひき続き用いた。「発話内世界」とは語られている場であり、発話内容の真偽を問題にし得る場、と定義される。すべての発話は必ず一定の発話内世界を持ち、それはさらに個々の名詞句の価値を決定するメンタルスペースの複合から成っている。これに対し、「発話状況」は発話者が発話を行っている現場であり、仏語の場合 *ici* と *maintenant* という二つの副詞で表現される。あらゆる *deixis* 表現がよってたつ基準は、正にこの「発話状況」の中心に位置する発話者の位置なのである。金水・田窪(1990)の「現場」および「現場スペース」という概念もこの「発話状況」の概念に重なるように思う。ただ彼らの論考との違いは、「こ」の指定する領域は「発話状況」(狭義の「現場」)そのものではない、ということである。(12)でいう「発話状況」スペースは現実の「発話状況」の写しではあるが、あくまで言語が構築する「発話内世界」の一スペースにすぎない。従って、「そ」の対象も「こ」の対象も「発話内世界」の一要素である、という点において何ら本質的な違いはないのである。となると、二つの指示内容の違いを問題にするためには、名詞句の意味構造の違いにまで立ち入って考えてみる必要がある。

そこで、「定名詞句の価値を持つ要素」という言い方に解説を加える。定名詞句とは、それを通して固体の指示が可能な「役割」の言語化されたものであり、仏語では *le N* の形式で典型的に示される。例えば *le président* の「大統領」という特性が役割であり、この役割は「フランス、現在」というスペースの中に置かれた時、*Mitterrand* という個別の値を特定するから、*le président* は言語表現としては定名詞句なのである。同じ役割も置かれるスペースが異なれば、別な値を特定することは言うまでもない。*le président* は「アメリカ、現在」であれば、*Clinton* を指示する。このように役割とは領域が決まると値域(値)が特定される関数であるが、定名詞句の場合、「値」を特定するためのパラメータの設定は、それが置かれるスペースによってなされる。「一定のスペースの

中で定名詞句の価値を持つ要素」とは、一定の役割が一定のスペースの中に置かれ、パラメータの設定がなされ、特定の値を持っている、潜在的な指示対象のことを言う。「こ」が指示するのはこのような要素である。

ここで注意しなければならないのは、名詞句が定名詞句となって個別の値を特定するためには、ヘッドの名詞が担う属性とそれ以外の属性を必要とする、ということである。ただ「少年」というだけでは対象は個別化されないが、「私が昨日出会った」という属性が付加されて「私が昨日出会った少年」となればその対象は一つに定まる。今、仮に指示の中心になる「少年」という属性を『対象属性』、対象を個別化させる「私が昨日出会った」という属性を『個別化属性』と呼ぶことにしよう。(『対象属性』が特定のスペースに置かれ個別の値を特定する力を持った時、その属性は『役割』として機能する。)「私は昨日一人の少年に出会った。少年は犬を連れていた。」という発話を考えてみよう。この照応文に現れる裸名詞「少年」は定名詞句だが、それはこの名詞が表す対象属性以外に個別化属性を文脈によって得ているからである。ただ、その個別化属性は先行文の情報をそのままの形で引き継ぐのではなく、発話内世界の解釈を通して、その中に存在する要素という資格で間接的に受け継いでいるように思われる。すなわち、上記「少年」の個別化属性は「私が昨日出会った」という文脈情報ではなく、「少年」という役割に与えられる『「昨日」スペースの中に導入されている要素』というパラメータなのである。このように考えると、上記の裸名詞が表現している対象こそ「こ」の指示目標に他ならない。上の発話は「少年」を「この少年」に置き換えることも可能だが、その場合その表現の背後に裸名詞(=定名詞句)で表現される価値をもった対象が存在している、と分析することができる。つまり、「私は昨日一人の少年に出会った。(少年は、)この少年は犬を連れていた。」この括弧の中に書いた言語化されない裸名詞で表現可能な要素こそ「この少年」の指示対象である⁶⁾。

これに対し、「そ」で指示される対象は対象属性以外に必ずNLIの文脈属性を担わなければならない。多くの場合、その属性は対象の特定に必要な個別化属性として機能する。上記の例で照応文を「その少年」とすることも可だが、その個別化特性はNLIである「私が昨日出会った」という情報そのものであり、これを直接引き継いでいるのである。

上記のメカニズムを例示するものとして、まず先行詞が固有名である場合をとりあげる。次のことが言えるであろう。

- (13) 固有名は、それ自体で定名詞句の価値をもち、個別化属性をNLIに依存する必要がないので、「そ」による指示は行いにくい。

実際に用いられた用例を見てみよう。

- (14) 幸いにして小六はその後一度もやってこない。この青年は、至って凝り性の神経質で、こうと思うとどこまでも進んでくるところが、書生時代の宗助によく似ている代わりに、不図気が変わると、昨日の事はまるで忘れた様に引っ繰り返って、けろりとした顔をしている。(漱石『門』540)

(14)の「この」を「その」に変えるのはかなり難しいように思う。小六はこの小説の主要人物であり、「小六」という裸の固有名のみで、特定の対象を指定するのに充分なのである。と言うより、裸の固有名はその使用によって、対象がすでに聞き手に対してもアイデンティティの確立したものであることを含意するので、主要人物を指示するのにふさわしいのである。このような時、「その後一度もやってこない小六」というように文脈の属性に依存して「小六」を指示する必要は、特に照応文の内容がその属性を要求するものでない限り、全くない。それどころか、他の属性を無視することになるので、おなじみの主要人物にはふさわしくないのである。実際「そ」が人物を受ける例の殆どは、談話に一般名詞で新たに導入された人物である。

- (15) 四度目には知らない男を一人連れて来たが、その男とこそこそ相談して、とうとう三十五円に価を付けた。(『門』1413)

但し、特にNLIの属性を伴って対象を指示したい時には、先行詞が固有名詞であっても(8)に従って「そ」が選ばれる。『門』にはそのような例が二例ある。

- (16) 役所が退けて、例の通り電車へ乗ったが、今夜自分と前後して、安井が坂井の家へ客に来ると云う事を想像すると、どうしても、わざわざその人と接近するために、こんな速力で、家へ帰って行くのが不合理に思われた。(『門』3571)

- (17) 「坂井さんからはその後何とも云って来ないかい」

「いいえ何とも」

「小六の事も」

「いいえ」

その小六は図書館へ行って留守だった。(『門』4269)

(16)の「その人」が指している内容は正に「坂井の家へ客に来る安井」であり、(17)の「その小六」は「坂井からその人のことについて何も云って来ない(ここで話題に登った)小六」なのである。(C. Atlanによる仏訳では *ledit Koroku* となっている)照応文で取り上げる対象が先行文で提示されたNLI属性を含意していることは明らかである。

ここで「発話状況」スペースの性格について考える。このスペースはあらゆる発話の背後に、最高位の親スペースとして潜在的に存在していると思われる。従って、すでに談話に導入され定名詞句の価値を持っている要素は、すべて「こ」によって指示される資格を潜在的に備えているのである。一方この「発話状況」スペースは、「こ」の使用によって初めて発話内世界に顕在化される、という側面を持つ。「近」の語感を持つスペースとして顕在化される以上、境界が意識されるのは必然で、現実の「発話状況」を話し手の視点から画定し、話し手がその中にある要素を「近」の距離感で捉えることのできる領域が発話内世界に実現するのである。従って、「こ」の使用は、その対象が取り込まれる領域を逆に作りあげ、その対象に近い位置に話し手の視点を設定する、という表現効果をもたらすことになる。

ここで久野(1978)が「共感(empathy)」の概念を導入するために用いたカメラアングルの比喩が思いおこされる。あらゆる描写は、必ず空間内の一点にカメラを供え、そこから見つめるような形でなされ、単一の文は単一のカメラアングルしか持ちえない。カメラアングルの位置は、対称詞や構文パターンの選択によって明示されることになるのだが、上述のプロセスに従って「こ」の使用もその位置の設定に大きく与かっているように思う。久野が視点(カメラアングル)の概念を例示するために用いた『三四郎』の冒頭部分を見てみよう。

- (18) うとうとして眼が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。
この爺さんは樋に前の駅から乗った田舎者である。

これが作中人物「三四郎」の視点にたって記述されたものであることは、一読して明らかである。なぜそのような効果をもたらすのかについて、久野は何も語っていないが、「こ」の使用がそれに一役かっていることは疑い得ないであろう。つまり、「こ」が「発話状況」スペースを開き、その中の要素「この爺さん」に近い位置に話し手の視点を設定するため、発話内世界の中で実際にこの対象に近い位置にある「三四郎」の視点と重なるのである。この文を三四郎の内言と読むことももちろん可能である。その場合、「こ」の用法は現場指示用法になる。だが、テキストレベルでこの内言が発動される現場を見た場合、それは先行文脈が構築する発話内世界のスペースとその要素によって構築される。つまり、このレベルでは(12)の条件が、やはり保たれているのである。(18)は金水・田窪(1990)が「視点遊離のコ」と呼ぶ用法の例示にも用いた例であり、「こ」の一つの典型的な有り方を示しているが、「こ」の機能そのものに視点を作中の登場人物に重ねあわせるという働きはない。「こ」が作り上げるのはあくまでも「発話状況」スペースであり、その中に位置する話し手の視点である。この視点の位置を作中人物のそれと合わせる働きは、文の意味内容そのものにある、と思われる。同じように小説の中で使われていても、(14)は作中人物というよりは、語り手の記述と解釈す

るのが自然だし、(18)は「こ」がなくとも「三四郎」の視点からの記述であることに変わりがない。まただからこそ、(18)で「そ」は使いづらい。三四郎の視点からすると眼の前にいる老人は談話がNLIで導入した要素ではなく、自分がいる現場(テキストレベルではスペース)に存在する個別の対象だからである。

「こ」の持つ話し手の視点を設定する、という性格から次の傾向が見出せる。

(19)「こ」は場面の転換など視点の置き方を変える場合に用いられやすい。

これまでに述べてきたように、「こ」は発話内世界に明示的に視点を設定するのだが、あらゆる発話の背後には必ず、それを描写する視点が存在している。従って、「こ」が使用される以前の視点と、「こ」が積極的に明示する視点との間には、多かれ少なかれずれが生じることになる。もしこのずれが全くないとすれば、視点が設定されているというニュアンスを感じることはできないであろう。実際(14)も(18)も、先行文と照応文の間に発話内世界のずれがあり、軽い視点の移動が生じている。(14)の先行文はその場の状況の記述であるが、照応文は「発話状況」スペースからの小六に対するコメントである。(18)の先行文は現場で起こっている事実の記述なのに、照応文はそれ以前の時をも射程内に収めた「発話状況」スペースからの追想である。しかし(19)の傾向がより顕著に現れているのは次のような例である。

(20) (a) 不図気が付いて見ると角に大きな雑誌屋があって、その軒先には新刊の書物が大きな字で広告してある。(b) 梯子の様な細長い枠へ紙を張ったり、ペンキ塗りの一枚板へ模様画みた様な色彩を施したりしている。(c) 宗助はそれを一々読んだ。著者の名前も作物の名前も、一度は新聞の広告でみた様でもあり、又全く新奇の様でもあった。(d) この店の曲がり角の影になった所で、黒い山高帽を被った三十位の男が地面の上へ気楽そうに胡坐をかいて、ええ御子供衆の御慰みと云いながら、大きな護謨風船を膨らましている。(『門』222)

(d) 文にある「この店」が指示するのは(a)文で導入された「雑誌屋」である。だが(b)(c)文で描写するのは広告板とその内容であり、ここでとっているカメラアングルは、(a)の位置に較べてより被写体に近い位置に、いわばズームするような形にとってある。この視点の移動は描かれている対象を通じて自然に流れていくのに対し、(d)に至ってこの流れは突然寸断される。語り手は「発話状況」スペースをここで開き、「この店」をその中の身近な要素と感じられる位置に視点をすえる。こうすることによって(a)の所であっていたグローバルなアングルに視点を戻すのである。この時、「店」という対象属性で指示しうる対象は、すでに発話内世界の中でそれ以外の豊富な属性を与えら

れ、個別の要素として確立していることは明らかであろう。ここで「そ」を用いることは必ずしも不可能ではないにしろ、どのNLIを用いるか判然としないので却って不自然である。談話において新規に導入された要素は、その位置から離れれば離れるほど、様々な属性が付加され発話内世界の要素としての地位を確立していく、(20)の例では(b)(c)の店の前に置いてある広告板とその内容の記述が「店」の属性記述としても働いているのである。従ってその分だけ「そ」は使いにくくなる。

一方(d)で(a)の位置に引き戻されたグローバルな発話状況の視点に立てば、(a)の記述と(d)の記述は隣接している。(b)(c)の記述は(a)の記述の中に包摂されてしまうような内容であり、記号化すれば(A) [(a),(b),(c)] + (B) [(d)...] というような構造になる。(b)(c)の記述がどれだけ膨れあがっても、それは(A)と(B)の距離を引き離すことにはならず、(A)で導入され定名詞句の価値を備えた要素を、(B)で(A)(B)を統括する位置から、「近」の距離感を持って捉えることには何の問題も生じない。これが「こ」において先行詞間距離が伸び、「そ」においては難しいことの原因である。こうして、(19)によって「こ、そ」の距離の逆転のパラドックスが一部説明されることになる。

次に、上記のプロセスとは逆に先行詞間距離が短い時、「そ」が好まれ「こ」が困難であることの原因について考える。談話に新たな要素を導入する文はすべてNLIであるから、その要素を直後に受け直す場合、「そ」が好まれることは(8)から明らかである。だが、その場合になぜ「こ」が困難であるのか、は決して自明なことではない。そもそも「こ」と「そ」は多くの場合交換可能であり、先行詞が直前にある場合、「こ」で受けることは本当に困難なのであろうか。このことについて一概に断定はできないが、大野(1977)の調査で「こ」の先行詞が同一句内に見つかった例が一例もないことはかなり有意義な結果であるし、近すぎる先行詞に対する制約も確かに存在するようである。以下、(21)から(24)まですべて堀口(1978)の例である。〔原文は片仮名〕

- (21) 人を見たら、それ(人)を泥棒と思え。
- (22) 箱があったので、それ(箱)に入れた。
- (23) 物の価値はその外見ではわからない。
- (24) 出家とその弟子

これらの「そ」を「こ」に変えることは不可能である。堀口は三上(1955)を引きながら次のように言う。

- (25) いずれも、事柄のまとまりを述べる一続きの叙述が未だ完了しないうちに、その叙述の中に表現した事物を指示の対象とするものである。未だ「明言」されておらず、未だ「確定」しておらず、未だ「明瞭な存在」となっていないのである。未だ「明瞭な存在」でないために、それは自己に関わり弱いもの

として平静に指示することしか許されないのである。話し手は、自由に対象化することが許されず、自己に関わり強いものとして捉えることが許されず、ただ自己抑制の平静指示である抽象ソでしか指示できないのだと考えられる。

この説明は基本的には正しいと思われる。だが、金水・田窪(1992)も指摘するように、堀口(1978)は説明に用いる用語の概念既定があいまいで、感覚的には理解できても、そのままの形では理論的な定式化になじまない。(25)でも、「明瞭な存在」とは何なのか、明確な定義が欲しくなる。叙述が完成しなければ明瞭な存在になりえない、と彼は言うが、この記述はそれほど自明ではない。(22)の「箱」は明瞭な存在ではないが、

(26) そこに箱があった。この箱は細かい細工が施された、実にみごとなもので、由緒ある品物のように思われた。

(26)の「箱」は明瞭な存在である、と言われても、「明瞭」という言葉の通常の語感から判断する限り、素直には顔きがない。しかも

(27) 戦力はこれを保持しない。

の「これ」の対象は、主題に明示されている「戦力」であって「明瞭な存在」である、という。しかし、主題に明示されているものが「明瞭な存在」であるというのなら、(23)の「物の価値」はなぜ明瞭な存在に成りえないのであろうか。(22)(23)(26)(27)の「こ、そ」の選択はほとんど迷う余地がないほど明確なのに、そこで問題になっている対象が「明瞭な存在」か否かの判断はそれこそ明瞭ではない。結局、(26)の「箱」が明瞭な存在に成りえて、(22)のそれが成りえないことを言うためには、(26)では叙述が完成しているのに(22)では完成していない、という構文的な性格に頼らざるを得ない。これではトートロジーである。結局のところ(25)は、このままの形では、一続きの叙述が完了しなければその叙述内容の事柄・事実を「こ」でとりあげることはできない、という事実の指摘以上の域を出ないのである。

しかし、(25)が述べようとしている内容は十分に受け継ぐ価値がある。問題は「明瞭な存在」をいかに理論的に定義し、それをどのように「こ」の持つ本来の語性と適応させるか、ということである。堀口のいう「明瞭な存在」とは、我々の図式で「定名詞句の価値を持つ要素」に概ね相当するように思われる。(25)の内容はメンタルスペース理論では次のように一般化できるであろう。

(28) 新たにスペース内に導入された要素は、そのスペースの記述が閉じられるまで、その内部では定名詞句として機能することはできない。

(28)は「こ、そ、あ」とは無関係に、定・不定表現をめぐって一般化が可能な、言語の普遍的な性格に根ざした事柄であると思う。(28)の一般性については別途議論するが、この(28)が認められれば、(12)で「こ」の殆どの用法や性格が説明できる。しかし(12)から(28)が自動的に導かれるわけではない。この点で筆者と堀口とは考え方をやや異にする。(25)は(21)~(24)における「こ」を、「こ」の本来の語性に抵触するものとして排除する試みである。堀口によれば「こ」「そ」は「近」「遠」の距離感以外に「自己に関わりの強い/弱い」という属性を本来的に備えている。この後者の性格の指摘が彼の「こ、そ、あ」論の中核にあるのだが、筆者はこの考え方を取らない。金水・田窪(1992)が指摘する用語の曖昧さはひとまず置くとしても、高橋・鈴木(1982)が調査したような「こ、そ、あ」の基本とも言うべき現場指示用法において、対象に対する自己の関わりの強弱は全く感じられないからである。つまり、堀口が指摘するようなニュアンスは文脈指示用法にしか存在しない。とすれば、「自己に関わりの強い/弱い」は「こ、そ、あ」の持つ本来の語性ではなく、本来の語性が文脈指示に用いられる時に、文脈指示の一般的な性格と連動して生じる表現効果に過ぎない、ということになる。(12)(28)はこの方向で問題を捉えようとする試みである。つまり、「こ」本来の語性(現場指示用法にも文脈指示用法にも等しくあてはまる語性)が表現する内容は、「近」の距離感で捉えられる領域に対象が存在するという点だけにすぎず、(21)~(24)が抵触するのはこの本来の語性ではなく、文脈指示用法における「近」の領域の要素たるべき条件であり、その意味で間接的である、と考えるのである。この観点に立てば「自己との深いかかわり」というニュアンスは、文脈指示用法における「近」の領域——ここで既定する「発話状況」スペース——の要素が満たしている語性であって、副次的なのである。

さて、(28)が証明されたものとして(21)~(24)を見てみよう。(21)(22)については問題あるまい。照応句が先行句と同じメンタルスペースの内部にあり、スペース記述が未だ完成していないので、(28)に従って先行詞は定名詞句になりえず、(12)に従って「こ」の先行詞には成れないのである。金水・田窪(1990)が先行詞の不特定性に従って排除する次の例も(21)同様のプロセスで(28)で説明できると思う。

(29) もし特急電車が留まっていたら、{* これ/ それ}に乗って行こう。

(29)と(30)の違いはスペース記述が閉じているか、否かということになる。

(30) もし私が家を立てることができるなら、高原の森のなかにロッジ風の家を立てたいね。{この/ その}家には、板張りの広いリビングを作って、大きな暖炉をしつらえるんだ。(金水・田窪, 1990:105)

(23)(24)についてはやや説明が要る。これらはいわゆる代行指示と呼ばれる用法であり、これまで扱ってきた限定指示用法とは意味構造を異にする。すなわち、これまで見てきた「このN」「そのN」は仏語ではce Nまたはle Nに相当するが、(23)(24)はson Nに相当する。これまで「こ、そ、あ」と一般化して述べてきた事は、この代行指示にも当然あてはまる。ただし、「こ、そ、あ」の(指示)対象として問題にするのは、名詞句「このN」「そのN」の指示対象であることに注意しなければならない。「その外見」「その弟子」の対象は先行文脈の中では導入されていないので、「こ」は(12)に従って排除される。確かに現場指示用法においては「こ」に代行指示の用法も認められるであろうが、文脈指示における代行指示は「こ」の場合、原理的に難しいと思う。事実、漱石『門』に使われた229例の「この」の用例のうち、はっきり代行指示であると断定できる用例は一例もない。(23)(24)における「そ」は全く問題がない。対象属性「外見」「弟子」以外に個別化属性としてNLIである「物(の)」「出家(の)」を引き継ぐのであるから(8)に従って、「そ」が選ばれるのである。(12)(28)の利点は(27)を認めるために「明瞭な存在」条件として「主題の位置におかれた名詞句」という条件を別個に立てる必要がないことである。(27)の「戦力」は総称名詞であり、このままの形で定名詞句の価値を持つので固有名詞同様「こ」で受けることができるのである。

以上(19)と(28)によって「こ、そ」の先行詞間距離のパラドックスは説明されるのである。

最後に「発話状況」スペースの性格についてまとめておく。このスペースが現実の「発話状況」ではなく、発話内世界に実現される一スペースである、ということについてはすでに述べた。現実の「発話状況」(仮に「現場」と呼んでおこう)との違いについて、まず、発話内世界に実現されるという性格から、「現場」で発話とともに展開される時間ではなく、発話内世界の時間軸に乗ることができる、ということがあげられる。

- (31) 彼はこの二三カ月間ついで、日の光りに透かして湯の色を眺めたことがない。
(『門』297)

ここで表現されている「この二三カ月間」とは、話し手のいる現場の時間ではなく、発話内世界の登場人物が置かれている時間軸を中心に、そこから遡る二三カ月であることは明らかであろう。

次に、「現場」にあっては、その空間内で「近」「中」「遠」の領域が分けられるのに対し、「発話状況」はそれ自身が「近」の領域であり、その中に「中」「遠」の領域は存在しない、ということをおかなくてはならない。これが現場指示用法と文脈指示用法の本質的な違いである。現実の物理的空間が存在する現場では、物理的な

距離が心理的距離に第一義的に反映するのに対し、そういった空間が存在しない文脈指示用法で「近」「中」「遠」の距離感が現場と全く違った形で現れることはさして驚くにはあたるまい。ここにおける距離感は情報をどのように受け入れ処理をするか、という人間の認知構造に基づいて行われているように思う。まず、発話以前に獲得されている情報を「遠」で捉え、発話行為の場の外に置き、発話行為の結果完全に発話の中に組み込まれた情報を「近」で捉え、そこまでに至らず、位置の定まらない対象を「中」で捉えるのである。この「近、中、遠」はそれぞれの対象が持つ情報の性格によって区別されるものであって、決して同一座標の上に連続的に位置しているものではないと思う。「発話状況」スペースの「こ」の領域の向こう側に「あ」の領域が存在したりはしないのである。この「発話状況」がある意味で「現場」に擬せられながら、尚「近」の要素のみで存在することが可能なのは、(20)の例が例示するように、文脈指示においてはカメラアングルの位置を自由に設定することが比較的可能なためであろう、と思われる。

「発話状況」スペースがこのように、「近」の要素のみで存在することから、その中の要素として取り上げられた場合、その対象は独自のニュアンスを持つ事になる。ここで再び(9)の火事の例を検討してみよう。「その火事」が指しているのは言うまでもなく「先週神田であった火事」であり、このようなNLIによる特定かふさわしいからこそ、「その」使用の典型的な例となるのだが、この文は「この火事」と言う事も可能である。先行文におけるスペース記述が閉じているために、「先週、神田」という時空スペースの中で唯一のものに特定される「火事」を指すことができるからである。ただ「こ」を使った場合、文体としてはやや特殊で、テレビのニュース報道のような印象を与えるように思われる。「この火事」は言うまでもなく、「発話状況」スペースの中にある要素という資格で当該の火事を指示している。この対象を話し手は「近」の領域のものとして捉えているのであるから、自分の縄張りに属する情報というニュアンスを対象に対して与える。このニュアンスは現場にあって、この火事に対する情報を自分の専門領域に属する情報とすることのできる、ニュースキャスターの文体に合致するのである。ここに至って我々の議論は神尾(1990)の「情報のなわ張り理論」と接点を持つ。堀口の主張する「対象に対する自己の深い関わり」という「こ」の語性も、このレベルで、文脈指示における「近」の領域の要素であることから生じるものなのである。その関わりが「あ」における関わりと異なるものであることは言うまでもない。

以上、日本語にまつわる問題は一通り処理し終えたと思う。次節から、上記の分析に基づいて、日本語と仏語の対象研究の試みを行う。

2. フランス語のdeixis

ここでは日本語との対象研究という観点から、日本語の「こ、そ、あ」表現に対応する仏語の deixis 表現を考察する。日本語のような三項体系を持たない仏語にあって「こ、そ、あ」が表現していた内容はどのようにして表現されるのであろうか。さらに deixis 表現としてどのような性格を共通して持つのか、日仏語の個別性はどこにあるのかを探る。その手掛かりとして、鷗外と漱石の仏語訳を用い、日本語の「こ、そ、あ」表現にどのような仏語が対応するのかを見てみる。

2.1. 「あ」に対応する仏語

「あ」は(7)で規定したように、「話し手の記憶」スペースに属する対象を、その属性と共にとりあげる。この記憶スペースは談話以前に持っている知識 ALI によって構成されるため、その指示は主観的な色彩が濃く、会話、独白の文によく出現し、不特定多数の読者を想定する地の文には現れづらい。また、聞き手が想定される会話文の場合、不必要に聞き手を対話から排除しない、という語用論的な理由から聞き手もその対象を ALI の中に持っていることが前提とされることが多い。これらの事は仏語の ce N の観念指示用法にも当てはまる。「あ」はこの点で ce N と対応するのである。

- (32) 家を持ってかれこれ取り紛れているうちに、早半月余も経ったが、地方にいる時分あんなに気にしていた家邸の事は、ついまだ叔父に言い出さずにいた。ある時お米が、「貴方あの事を叔父さんに仰って」と聞いた。(『門』698)

Une fois entrés en possession de leur nouvelle maison, la moitié d'un mois s'écoula bien vite, mais Sôsuke n'avait pas soufflé mot à son oncle de la question de la propriété, qui lui tenait tant à coeur lorsqu'ils étaient encore en province. Oyone demanda un jour à son mari :— Tu a déjà parlé de *cette histoire* à ton oncle ?

「あの事」が家邸の問題であることは、地の文から明らかであるが、お米の会話の中では明示されていない。「あの事」の指示対象はお米の観念(記憶スペース)の中のみ存在する。ただし、宗助に向かって問いかけている文であることから、宗助も予めこの対象が何であるかを知っていることが前提とされている。翻訳から、仏語の *cette histoire* も、同様の効果を持って使われていることがわかる。「あれ」が使われた類例をもうひとつあげておく。

- (33) 「姉さん、兄さんは佐伯へ行ってくれたんですかね」と聞いた。「この間から行く行くなって云ってる事は云ってるのよ。だけど、兄さんも朝出て夕方に帰

るんでしょう。帰ると草臥れちまって、御湯に行くのも大儀そうなんですもの。だから、そう責めるのも実際御気の毒よ」「それゃ兄さんも忙しいには違いなからうけれども、僕もあれが極まらないと気掛かりで落ち付いて勉強も出来ないんだから」(『門』157)

— Dites, est-ce qu'il est allé voir les Sakai ?

— Ça. Pour dire qu'il va y aller, il le dit. Mais tu sais bien, il part le matin et ne rentre que le soir, et quand il rentre il est tellement épuisé que rien que pour aller aux bains, c'est toute une histoire. Alors ça m'ennuierait de le relancer en plus pour ça.

— C'est sûr qu'il est très occupé, mais moi je n'avais même plus à travailler normalement, tellement je me fais de souci à cause de *cette affaire* qui n'est toujours pas réglée.

この会話の中でも「あれ」の内容は明示されていないし、この段階では読者にも不明である。だが当事者達の間では了解済である。*cette affaire* についても同様の事が言えるから、共有知識効果は日本語の「あ」のみが持つ特殊な性格ではなく、観念指示に用いられる deixis 表現が、会話に使われた時必然的に帯びる性格なのではないかと思われてくる。

「あ」はさらに、対話者を想定しない内言に用いられることも多い。この場合、共有知識はそもそも相手が存在しないのだから問題にはならない。内言を発する人の観念の中に対象が存在していれば、「あ」を使用できる。

(34) 己が夕方にでもなって、湯にでも行って、気の利いた支度をして、かかあに好い加減な事を言って、だまくらかして出掛けるのだな。そしてあの格子戸を開けて、ずっと這入って行ったら、どんな塩梅だろう。(『雁』258)

C'est bon. Le soir, après le bain, je m'habillerai avec soin, je donnerai à la mémère un prétexte quelconque pour l'endormir, et je sortirai. Et puis, en ouvrant *cette porte treillissée*, si j'entre tout droit, qu'est-ce que ça donnera ?

ここで言及されている「あの格子戸」は先行文脈に現れた格子戸ではなく、話し手の観念の中に存在する格子戸である。翻訳から仏語の *ce N* もこのような場面で使用できることがわかる。

こうして見てくると、仏語の *ce N* にも観念指示の用法があり、それが「あ」に相当する、ということがまず言えるであろう。ただし日本語の「あ」は春木(1991)も指摘するように、現場指示以外は全て第一義的に観念指示であり、狭義文脈指示の用法は存在しない。これに対し、仏語の *ce N* は「こ、そ」がになう文脈指示の用法も備えている。つまり、「あ」は観念指示に使用されるべき語性を備えているのに対し、*ce N* にそ

のような語性はなく、観念指示となるべき、独白、対話といった特別な文脈に支えられなければならない、ということになる。もっとも、「あ」自体もそのような文脈を好み、そのような文脈の中では「こ、そ」は選ばれないので、そこでは結果的に「あ」と *ce N* が等価となるのである。ただ、「あ」は中立的な文体でも自らの力で観念指示を行えるのに対し、*ce N* は文脈に基づかなければ観念指示を行えないので、その制約は「あ」より厳しくなる。

- (35) 「何か刃物はありませんか」と岡田は言った。主人の女が一人の小娘に、「あの台所にある出刃を持ってお出で」と言い附けた。(『雁』1495)

— Avez-vous un instrument tranchant ? demanda-t-il.

La maîtresse de maison ordonna l'une des filles d'aller chercher *le couteau à découper dans la cuisine*.

この訳文の *le* を *ce* に換えることはできない。また仏訳を日本語に再翻訳した場合、恐らく「あの」は消されてしまうであろう。つまり(35)の「あの」が表現するニュアンスを仏語で表現することは不可能なのである。(35)が観念指示となるためには、この *couteau* が観念の中に浮かんでいることを文脈が暗示しなければならないが、*histoire* や *affaire* ならその種の含意をもたらせても、具体的な *couteau* で対話の場合は難しい。(34)が具体的な *porte treillisée* でありながら、尚観念指示でありえているのは、文全体が観念で形成される内言だからであろう。日本語の場合、「あ」自体に観念指示の語性があるのだから、文脈によってここまで支えられる必要はない。(35)で「台所にある出刃」ではなく「あの台所にある出刃」と言うことによって、この女主人の観念の中に具体的な「出刃」のイメージが浮かび、その出刃の持つ属性も考慮に入れながら、この対象を指示している、というニュアンスを生じさせることができるのである。日仏語の違いを定式化しようとする時、この属性の含意に着目することで最も明晰な記述が得られると思う。

- (36) 日本語の「あ」はそれ自体が観念指示の語性を持っており、「あ」で指示される対象は、必ず「話し手の記憶」スペースの中の属性を伴ってとりあげられるのに対し、仏語の *ce N* は文脈に支えられて観念指示を行うにすぎず、観念の中に存在する属性を暗示する効果は持っていない。

この(36)によって、(10)の仏語直訳が排除される。

- (37) Aujourd'hui il y a eu un incendie à Kanda. ??Puisqu'il s'agit de *cet incendie*, je crois qu'il y a beaucoup de morts.

(10)が可であったのは、照応文においてその推論の根拠に、「あの火事」が含意する属性を用いているからである、と説明された。仏語の *cet incendie* にはそのような属性の含意はなく、(37)の文脈では日本語の「この火事」「その火事」に相当する文脈指示に読まれてしまう。従って(37)は日本語の「こ」「そ」が排除されるのと同じ意味的なおかしさによって排除されてしまうのである。

(36)はさらに次の例を説明する。

(38) しかし胎児の頸を絡んでいた臍帯は、時たまある如く一重ではなかった。二重に咽喉を巻いている胞を、あの細い所を通す時に外し損なったので、小児はぐっと気管を絞められて窒息してしまったのである。(『門』2614)

Mais le cordon ne faisait pas, comme il arrive le plus souvent, un tours autours du mince cou de l'enfant, mais deux, si bien que, comme elle n'avait pas réussi à dégager ces deux tours au moment où il franchissait *l'étroit passage*, le bébé était mort étouffé par une constriction du larynx.

これは『門』の中で使われた12例の「あれ」28例の「あの」のうち、唯一地の文の中で使われたものである。この仏訳の *l'étroit passage* を *cet étroit passage* に換えることはできない。日本語では「あの細い所」だけで、それがどこのことであるかがわかり、その場所に関わる属性をも含意するが、仏語にこのような含意を生み出す力はなく、観念指示には成りえない。仏語で(38)に相当するのはいわゆる「周知の指示形容詞」と呼ばれる用法である。「あ」と「周知の指示形容詞」との比較については、すでに春木(1991)に詳しい論考があるので、ここではわれわれの議論に直接関係する次の事実を指摘するにとどめたい。春木によると、その用法は基本的に「指示形容詞+名詞+関係節」という構造で現れる。関係節の代わりに、分詞や形容詞が付く場合もあるが、いずれの場合も、日本語では「あ」によって言外に暗示できた属性が、仏語では明示されなければならない。しかしその明示によって文脈的に観念指示が可能となり、日本語の「あ」と同様な表現効果を持つ「周知の指示形容詞」の用法が生じるのである。春木(1991)の引く典型的な例をあげておこう。

(39) Elle ressemblait à ces orchidées qui, à l'heure de la pollinisation, exhalent leurs parfums les plus forts pour attirer l'insecte. (N. Avril, *Jeanne*, in 春木(1991))

ここでは *qui* 以下の記述が *ces* を周知の指示形容詞たらしめるのに不可欠なのである。周知の効果がなせ生じるか、について筆者は春木と意見を異にするが、そのことに關してはまた稿を改めて論じたい。

2.1. 「こ、そ」に対応するフランス語の deixis

現在のところ、この問題に関して筆者の考察はまだ進んでいない。ただ二種の翻訳の比較から予想される事柄を二三指摘しておく。まず、「こ」は多くの場合 ce N に相当し、「こ、そ、あ」の三類のうち、ce N で訳出される率が最も高い。「そ」は逆に ce N で訳出される比率が最も低く、むしろ、次例のように anaphorique な表現とよく呼応するようである。

- (40) と云いながら、小六は真鍮の火箸を取って火鉢の灰の中へ何かしきりに書き出した。お米はその動く火鉢の先を見ていた。(『門』159)

Tout en parlant, Koroku avait pris les pincettes de cuivre de brasero, et griffonnait rageusement dans les cendres du brasero. Oyone avait les yeux fixés sur *le bout des pincettes*.

ただし、次例のように ce N で訳してある例もあるのであるから、「そ」が anaphorique である、と一概に断定することも出来ない。

- (41) 「ええ本当に出したのよ。今兄さんがその手紙を持って出しに行ったところなの」(『門』169)

— Il leur a écrit, je t'assure, et il vient même de sortir avec *cette lettre* à la main pour la poster.

3. 結論

本稿の主たる主張は、日本語の「こ、そ、あ」の本来的な語性は、その対象が話し手の位置から「近、中、遠」の心理的な距離感で捉えられる領域に存在する、ということを表すが、その領域は現場指示用法と文脈指示用法とでは全く異なった現れ方をする、ということである。文脈指示にあっては、(7)(8)(12)の原理に従ってその領域が捉えられる。「こ」「そ」に関する一見不可思議な振る舞いも、これらの原理から派生する(13)(19)および、(12)の補足原理である(28)によって説明が可能になる。

仏語との対照にあたっては、ce N に「こ、そ、あ」それぞれに対応する用法があり、「あ」の持つ「共有知識効果」も deixis に関する一般原理から、仏語における「周知の効果」ともからめて説明できる可能性が大きい。三項体系を持たない仏語で日本語と同様な表現が可能なのは、日本語の「こ、そ、あ」が行っている区分を、文脈の違いに依存して行っているからであろうと思われる。いずれにせよ、対照研究は今やっと

その緒についたばかりであり、これからの課題である。だがその見通しは決して暗くはない。

註

- (*) 本稿は、N. Ruwet教授が主催するパリ第8大学言語学セミナーで筆者が93年1月18日“La deixis en japonais”のタイトルで行った発表が元になっている。発表に際して、三藤博氏より貴重な助言を数多く頂いた。氏の他、セミナーにおいて発表の機会を与えて下さったRuwet先生、初稿段階で丁寧な校閲をしてくれた奥田智樹氏に感謝の意を評したい。尚、本論文の内容には仏語の考察も含めて、現在準備中の博士論文“Le problème linguistique de la référence des syntagmes nominaux en français et en japonais”で再度詳しく論じられる予定である。
- (1) これまでの研究史の流れについては、金水・田窪(1992)に詳細な紹介がある。本稿で扱う「こ、そ、あ」は名詞句である「これ」「それ」「あれ」と「このN」「そのN」「あのN」であるが、「こ」「そ」「あ」と一般化して述べる時、その記述は「ここ、こちら、こんな」等を含めた「こ」系「そ」系「あ」系全体に通じる原理を志向している。
- (2) 底本には、教育社 1984年 近代作家用語研究会教育技術研究所編『作家用語索引 夏目漱石』『作家用語索引 森歐外』を、翻訳には Corinne Atlan 訳“La porte”, Editions Philippe Picquier, 1992. および Reiko Vergnerie 訳“L'Oie sauvage”, pof, 1987. をそれぞれ用いた。引用の出典銘記の部分で、『門』『雁』の後ろにある数字は指示詞が生じた文の文番号を表す。
- (3) ラテン語の情報については三藤氏より得た。
- (4) ここでは「文脈指示」を「文章中に現れた」の意味で用いる。後に述べるように先行文脈で導入された要素を直接指示する狭義文脈指示の用法は「あ」には存在しない。
- (5) 金水・田窪(1990)が用いるスペース、と本稿で用いるスペースは同義ではない。
- (6) 「定名詞句の価値」を持つことは、必ずしも定名詞句で表現可能という意味ではない。ここではあくまでも意味的に「定」であるか否かを問題にしている。実際の定名詞句(仏語の le N、日本語の裸名詞等)は、その使用にあって定であるという意味的条件以外に多くの制約が課せられる。仏語の le Nについては井元(1989)参照。

参考文献

- 井元秀剛 (1989) 「le N と ce N による忠実照応」『フランス語学研究』23号
— (1991) 「人称代名詞 IL の指示対象 — 主に CE との対比において —」『仏語仏文学研究』7号 (東京大学仏語仏文学研究会)
— (1993) 「anaphore 概念に関する一考察」『フランス語学研究』
- 大野美江子 (1977) 「文章に使われた指示語 — コ系ソ系の機能差 —」『東京女子大学日本文学』48
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論』(大修館書店)
- 金水 敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3 (日本認知科学学会)
— (1992) 「日本語指示詞研究史から / へ」『日本語研究資料集第 1 期 7 巻 指示詞』(ひつじ書房)
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』(大修館書店)
— (1978) 『談話の文法』(大修館書店)
- 黒田成幸 (1979) 「(コ)・ソ・アについて」『林栄一教授還暦記念論文集・英語と日本語と』(くろしお出版)
- 佐久間鼎 (1951) 『現代日本語の表現と語法 (改定版)』(1983, くろしお出版より復刻)
- 高橋太郎 (1956) 「『場面』と『場』」『国語国文』25-9 (京都大学文学部国語国文学研究室)
- 高橋太郎・鈴木美都代 (1982) 「コ・ソ・アの指示領域について」『国立国語研究所報告集 71 研究報告集 3』
- 服部四郎 (1968) 「コレ・ソレ・アレと this, that」『英語基礎語彙の研究』三省堂
- 春木仁孝 (1991) 「指示対象の性格からみた日本語の指示詞 — アノを中心に —」『言語文化研究』17 (大阪大学)
- 堀口和吉 (1978) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 (大阪外国語大学)
- 三上章 (1970) 「コソアド抄」『文法小論集』(くろしお出版)
- Akatsuka, Noriko (1985) "Conditionals and epistemic scale," *Language*, 61.
- Lakoff, Robin (1974) "Remarks on *this* and *that*", *C.L.S. Chicago Linguistic Society*, vol. 10.
- Yoshimoto, Kei (1986) "On Demonstratives *KO/SO/A* in Japanese", 『言語研究』90